

## 『アドラー育児の歌』を使って

石川美紀子 (石川)

**要旨:** 『アドラー育児の歌』を使って事例検討を行った。最初に歌詞について共通理解をはかるために講演記録等の見直しを行い意味を抜粋し、『パセージ』のテキストに戻って問題解決のための筋道を考えていった。実践を通して私たちが感じたことは、

1. 『アドラー育児の歌』は、大変コンパクトにまとまっており、考え方の筋道が立てやすく誰でも『パセージ』を「トップダウン」で考えることができる。これは、グループとして、全員が同じ筋道、目標をもって考えやすくなるという利点があること。
2. 『アドラー育児の歌』は、七五調の歌詞であることから、現場でまさにその瞬間に、歌詞が頭の中にテロップとして浮かびやすいということ。ワンフレーズで歌詞を持ち帰ることができ、グループで学んだことを思い出しながら、子どもを勇気づける方向へ自然と向かっていくということ、である。

私たちは、『アドラー育児の歌』とそれに基づいて学びを共にする仲間がいることで、一人一人の援助力があがってきていると感じている。

**キーワード:** アドラー心理学、育児、パセージ、事例検討、自助グループ

平成28年10月に新潟で開催された日本アドラー心理学会総会にて、「実践報告『アドラー育児の歌』を使って@金沢」の発表の機会をいただきました。これは、総会での発表原稿に加筆・修正を加えたものです。

### 1. はじめに

#### 実践報告の目的とその方法

今回は『アドラー育児の歌』で事例検討をしている金沢の自助グループ、エンカレッジ金沢のかがやきの会の実践報告をさせていただきたいと思います。『アドラー育児の歌』から私たちが何を学んでいるか、学んだことが現場でどのように活かされているかについて検討し、『アドラー育児の歌』の効果について発表したいと思います。

金沢では、平成25年から野田俊作先生が3回にわたって保育士向けの講演をして下さいました。大竹優子先生も金沢で行われた保育士向けの講演会で『アドラー育児の歌』を現場でどう使っていくかについて教えて下さいました。私たちは、そこから多くのことを学ばせていただき、中でもグループの援助力を意識できるようになりました。そしてグループの援助力が少しずつ上がってきていることを実感するようになりました。この学びはアドラー心理学を学ぶすべての人々に

返していくべきだと考え、実践報告をさせていただくことを決心しました。

昨年度は、学会のシンポジウム「保育とアドラー心理学」の中で、主に1番までの歌詞を使い検討しました。<sup>1)</sup> 今年度は4番までの歌詞を使って検討しています。

## 事例検討の期間・方法

事例検討の期間は、平成27年8月から平成28年10月現在までです。

検討の方法としては、全員で『アドラー育児の歌』の意味について共通理解をはかるため、講演記録の見直しを行ったうえで、1節ずつの意味を記録から抜粋しました。

歌詞を1節ずつ検討すると同時に、『パセージ』のテキストに戻って問題解決のための筋道を考えていきました。

この間、7事例の検討を行いました。

## 『アドラー育児の歌』の意味紹介

それでは次に、『アドラー育児の歌』の意味について説明したいと思います。

発表の際は、ここで『アドラー育児の歌』の小冊子を配布し、『アドラー育児の歌』を流しました。

## 『アドラー育児の歌』

どんなときでもプラスを見  
学んでもらうことを決め  
よい学びかたを覚えて  
やさしくきっぱり育てましょう

手を出さないで学ぶのと  
相談しながら学ぶのと  
どちらがよいか覚えて  
子どもの自立を助けてみましょう

成功したら喜んで  
失敗したら相談し  
目標決めてひとつずつ  
前に進んでいきましょう

おおやけ心と常識と  
世間を渡る算段を  
身につけるよう勇気づけ  
子どもも親も育ちましょう

まず全体として、  
1番は、アドラー育児の骨格

2番、3番は、アドラー育児の方法

4番は、アドラー育児の目標

について書かれていると考えました。

1番の歌詞については、昨年度のシンポジウムの中で紹介させていただきましたが、改めて1番から4番までを紹介します。

### 1番

どんなときでもプラスを見

- ネガティブな側面から発想するのをやめよう、子ども一人一人のポジティブな側面を見る
- 子どもが僕らの気に入らないような行動をとったときこそ！！プラスの面を見よう

学んでもらうことを決め

- まず落ち着いて学んでもらうことを決める
- 学んでもらうというのは2つの意味がある
- 行為であること→あることを体にやってもらうことであり、やめてもらうことではない。やめてもらうことは学べない
- ポジティブなこと→やっていないポジティブな行動を新しくつくること

よい学び方を求めて

- 学んでもらう目標と技術を区別する
- 学んでもらう目標をまず考えて、それからどんな学び方をすれば、それが子どもに伝わるかという技術的な問題を考える

やさしくきっぱり育てましょう

- 我々と子どもとは対等な人間、譲らないけれど絶対に戦わない
- 子どもの機嫌をとって育てる気はない
- 子どもを厳しく、スパルタに目にももの見せて思い知らせて育てる気もない

### 2番

手を出さないで学ぶのと

相談しながら学ぶのと

どちらがよいか求めて

- 子ども自身にやってもらって、たとえ失敗してでも子ども自身が自分でやる方が子どもがよく学ぶかなと考える→課題の分離
- 大人と一緒に相談しながらやる方を選ぶと、子どもがよく学ぶかなと考える→共同の課題
- 子どもにやってもらうか、大人が手伝うかこれはいつでも選択できる

子どもの自立を助けましょう

- 人間は社会的な動物だから一人では絶対に生きられない  
自立とは自ら立つ、自分のことができるということではない
- その一歩先の自分の力を他の人のために役立てて生きていくことを意味する

### 3番

成功したら喜んで

### 失敗したら相談し

- いつもポジティブな側を評価すること、出来たという側を評価すること
- せっかくなまくいかなかった！冷静に「どうして失敗したんだろうね」「どうすれば成功するんだろうね」と親子で話し合う
- 怒りなどの陰性感情を使う必要はまったくないし、ご褒美などで釣る必要もない

### 目標決めてひとつずつ

#### 前に進んでいきましょう

- 目標は実現可能で行為であること、ポジティブなこと
- 今は何点？ 1点ずつ上げていく
- 段階に分けて、一歩ずつ達成していく
- 親と子どもとの共同作業として、子どもの成長を助ける

### 4番

- アドラー心理学の根本の理念→共同体感覚（おおやけ心）の育成について  
（わたくしがしあわせになることではなく、みんながしあわせになることが人生の目標）

### おおやけ心と常識と

- 常識とは社会で生きていくためにみんなが知っていること→共通感覚
- おおやけ心とは、みんなが幸せになるためには私は何をすればいいだろうという心→共同体感覚  
それに対して、
- わたくし心とは、私が幸せになるためには私は何をすればいいだろうという心
- 常識の中に、世の中のため、人のため、にならないものもある  
だからおおやけ心で点検していく
- おおやけ心と常識の両方をいつも考え、子どもたちに教えていく

### 世間を渡る算段を

- 算段とは、人間社会を生きていく基本的な方法、学校で習うこと
- 例えば、朝は「おはよう」、人に何かをしてもらったら「ありがとう」、赤信号は止まれ、読み書きそろばん

### 身につけるよう勇気づけ

#### 子どもも親も育ちましょう

- 親が子どもを育てるのではなく、子どもからたくさん学び、一緒に育つ
- 親の子どもに対する構えのこと

## 2. 実践報告1

次に、『アドラー育児の歌』を使って事例検討したものを2つ、紹介したいと思います。事例は2つとも保育現場での話です。（事例に出てくる園児の名前は仮名を使用しています。）

1つ目は、D保育園 2歳3か月のけい君の事例です。

けい君は、お昼寝からなかなか起きられず、毎日最後まで寝ていました。おやつの順番が前半のグループなので、早く起こさないとみんなを待たせてしまうので、何とか機嫌よく起こしてスムーズにおやつを食べて欲しいと思って起こしていました。また毎日繰り返される寝起きの大泣きに困っていて、どうすればいいかと思っていました。

保育士：また泣くかな？と思いながら、気合いを入れて、けい君を抱っこして、「けい君、おはよう。今日のおやつはツナ蒸しパンだよ。一緒に食べよう」と声をかけて起こす。

けい君：「いらない！おやつはいらない！」と目をつぶりながら泣いている。

保育士：食べるのが大好きなので、おやつメニューを言うことで、気分が変わることを期待しながらもう一度「ツナ蒸しパンおいしいよ。一緒に食べよう。」と声をかける。

けい君：「いらない！」と言って大声で泣く。

保育士：しばらく抱っこしているが泣き止まない。おやつの準備があるため、泣いているけい君をゴザの上に座らせる。

けい君：そのまま一人で泣きつづける。

保育士：おやつの準備を済ませてから、改めて「けい君おやつだよ」と声をかける。

けい君：泣きやんで、おやつコーナーに来ておやつを食べる。

『アドラー育児のうた』で検討して、問題解決のための筋道を考えていきたいと思います。

## 1番

### どんなときでもプラスを見

けい君のプラスの面を探してみました。

- 元気
- 自分の気持ちを素直に表現できる
- 周りの人を叩いたり、物に当たったりなどしてないので、人に迷惑をかけていない
- 泣きやんで、おやつコーナーに来ておやつを食べる

### 学んでもらうことを決め

けい君に学んでもらいたいことは「自分の機嫌を自分でなんとかする」になりました。

### よい学び方を覚えて、やさしくきっぱり育てましょう

ここは、2番の歌で検討しました。

## 2番

### 手を出さないで学ぶのと

相談しながら学ぶのと

### どちらがよいか覚えて

まず、寝起きでけい君が機嫌が悪くて泣いているのは、年齢が進むと消えてしまう不適切な行動ではないかと考えました。また、これは、けい君の課題だと考え、自分の機嫌は自分でなおすことを学んでもらうため、「課題の分離」として対応していくことにしました。

『パッセージ』でいうと37-L「不必要な介入を避けよう」と13-L「子どもの課題と親の課題」です。

寝起きで機嫌が悪い時に、機嫌をよくしようとしてかかると、弊害が起こるのではないかと考えました。これは『パセージ』でいうと、14-L「子どもの課題に口を出す弊害」の2の「依存的になる」、3の「反抗的になる」、5の「親が忙しくなる」という弊害があるように思いました。

### 子どもの自立を助けましょう

自分の機嫌を自分でなんとかしてもらうためには、まず、けい君に「基本的安全感」と「基本的信頼感」が育つようにかかわることが大切だと考えました。「基本的安全感」、「基本的信頼感」というのは、2015年野田俊作先生の「保育とアドラー心理学Ⅲ」の講演の質疑応答のところで、「2歳半以下の子が知らなきゃいけないことは、この世はいいところだということ、それから人々はみんないい人だということ、自分は大丈夫だということ」だと教えていただきました。

代替案として、具体的な行動としては、ベッドから起こして抱っこして、「けい君、おはよう。今日のおやつはツナ蒸しパンだよ。一緒に食べよう」などと声をかけることになりました。

これはエピソードでの保育士の言葉と同じものです。

その後は泣くかもしれないし、不機嫌になるかもしれないが、ゴザに座らせて、けい君自身にどうするか決めてもらう。ことにしました。

### 3番

成功したら喜んで

失敗したら相談し

目標決めてひとつずつ

前に進んでいきましょう

自分で機嫌をなんとかしておやつと一緒に食べるようであれば、保育士も一緒におやつを食べながら、「みんなで食べるとおいしいね」などとみんなでおやつを食べることの楽しさを伝えるようにしました。

### 4番

おおやけ心と常識と

世間を渡る算段を

身につけるよう勇気づけ

子どもも親も育ちましょう

このエピソードでの常識は、「保育園ではおやつの時間は決まっているので、その時間にみんなでおやつを食べる」「集団生活なのでいつまでも不機嫌でいない」ではないかと考えました。

おおやけ心は、「自分の機嫌を自分でなんとかしてみんなとおやつを食べることは、みんなが幸せになるために、けい君ができること」だと考えました。

泣き止ませようとして、「けい君おはよう」「今日のおやつはツナ蒸しパンだよ」と声をかけると、泣いていることはいけないことだと感じたり、泣きやみなさいと伝わったりと「縦の関係」になってしまう。ということがわかりました。

### 事例提供 青さんの感想

毎日繰り返されて少し困っているけい君のエピソードで、事例検討をしてみました。

『アドラー育児の歌』で事例検討をする前は、保育の現場の中で「縦の関係」で関わっていることが多かったように思います。子どもが泣いていると、何とかしなくては！と手を出してしまいがちだったり、けい君の事例の場面では機嫌よく起きてほしい、時間になったらおやつを食べ

てほしいという保育士の気持ちを優先してしまっていたように思います。

今回、『アドラー育児の歌』で検討すると、「どんなときでもプラスを見」で、けい君のプラスの面を改めて意識できました。けい君の寝起きで泣いてしまうのは、2歳3か月くらいの子どもにはよくある寝ぐずりで、年齢が進むと消えていく不適切な行動だということがわかりました。ゆえに不必要な介入を避けるために、これはけい君の課題と考えて「課題の分離」をすることが、けい君を勇気づけることにつながっていくこと、手を出すことによって、様々な弊害を起こしかねないことを学び、「縦の関係」から「横の関係」に立って、けい君を援助できたように思います。

ところで点検前と点検後に、けい君にかけた保育士の言葉は同じです。「縦の関係」で言葉をかけると、けい君は泣いていることは悪いことと感じたり、泣いていると誰かが助けてくれると学んだりするのではないか、「横の関係」で言葉をかけると、「基本的信頼感」と「基本的安全感」が育つのではないかと考え、この2つに大きな違いがあることに気がつきました。

### 3. 実践報告2

A保育園 4歳児ゆなちゃんの事例です。

この事例については、発表の際、ロールプレイを行いました。

れいちゃんとまこちゃんが積み木コーナーで、積み木の塔を窯に見立て、積み木のパンを焼く「パン屋さんごっこ」をして遊んでいた。保育士が2人に「おいしそうだね」と声をかけると、「焼けました～」と見せてくれた。そこへ、ゆなちゃんがやってきた。

ゆなちゃん：「何してるの？」

れいちゃんとまこちゃん：答えず、下を向いたまま黙って作業をしている。

保育士：ゆなちゃんが聞いているんだから何か答えないと…と、思い「(ゆなちゃんに向かって) パン作っているんだって」

ゆなちゃん：「ゆなもしたい」

れいちゃんとまこちゃん：黙って積み木を重ねている。

保育士：「(ゆなちゃんに向かって) 聞いてみたら？」

ゆなちゃん：「(れいちゃんとまこちゃんに向かって) ゆなもまぜて」

まこちゃん：「れいちゃんに聞いて」

れいちゃん：何かを取りに少し離れたところへ移動していた。

ゆなちゃん：「(保育士に向かって) ゆなもしたいーい」

保育士：「まこちゃんは、どう思う？」

まこちゃん：「まこは、いいけど」

ゆなちゃん：(パッと嬉しそうな表情になって)「じゃあ、ゆなは何したらいい？」

まこちゃん：(急に強い口調で)「それは自分で考えて！」

ゆなちゃん：しゅんとした表情になる。

保育士：まこちゃん、そこまできつく言わなくても…困ったなど、思いつつも様子を見る。

まこちゃん：しばらくそこで作業を続けていたが、れいちゃんのところへ行く。

ゆなちゃん：何も言わずその場から離れていった。

このお話は、ゆなちゃんが上手に遊びに混ぜてもらうことができなかつた話、つまり失敗のお

話として考えてみました。ゆなちゃんは、れいちゃんとまこちゃんに「何してるの」「ゆなもしたい」「ゆなもまぜて」と伝えていますが、うまく遊びにまぜてもらえず、この後、ゆなちゃんはどうしたらよいかわからないでいると考え、対応を工夫してみることにしました。

『アドラー育児の歌』で検討して、問題解決のための筋道を考えていきたいと思います。

## 1番

どんなときでもプラスを見

学んでもらうことを決め

3人のプラスの面は

ゆなちゃん

- やりたいと思ったことは自分でやろうとする
- 言葉で自分のやりたいことが伝えられる
- 了解を得て遊びに入ろうとする
- 友だちと遊びたい
- ごっこ遊びができる、好き

れいちゃん

- ゆなちゃんに対し傷つける言葉を言っていない
- まこちゃんと仲良く遊んでいる
- ごっこ遊びができる、好き

まこちゃん

- れいちゃんと仲良く遊んでいる
- 自分の考えをはっきり言葉で伝えられる

『パセージ』のテキストで点検すると2-Lの2「その行動は不適切であることを知っているが、どうすれば適切な行動ができるのか知らないとき」だと考えました。

↓

そこで、ゆなちゃんにはそのうちの「主張的な頼み方」を学んでもらいたいと考えました。

20-R「頼み方の4つのパターン」の「主張的な頼み方」のところです。

そこで、学んでもらうことは「ゆなちゃんが遊びにまぜてもらうために、断られても『主張的な頼み方』をする」になりました。

よい学び方を覚えて

やさしくきっぱり育てましょう

よい学び方については、2番と3番の歌で検討することにしました。

## 2番

手を出さないで学ぶのと

相談しながら学ぶのと

どちらがよいか覚えて

ゆなちゃんはこの場面での「主張的な頼み方」を知らないため、上手に遊びにまぜてもらうことに失敗してしまいました。今後、失敗しないためにどうすればいいか保育士と相談して、「共同の課題」を作っていく方がゆなちゃんにはよいことを学んでくれるのではないかと考えました。

相談するためには、まず、ゆなちゃんの話をお聴く必要があり、保育士とのやり取りを通して、「主張的な頼み方」を学んでもらえるのではないかと、さらに「主張的な頼み方」ができると、れいちゃんやまこちゃんに対して、遊びにまぜてもらおうための手続きを踏んで「共同の課題」にしてもらうようお願いできるのではないかと考えました。

『パセージ』で考えると、ゆなちゃんはいちちゃんとまこちゃんに「何してるの?」「ゆなもしたい」「ゆなもまぜて」と伝えていますが、うまく遊びにまぜてもらえず、その後、ゆなちゃんはどうしたらよいか分からないでいると考えました。

これは、2-L「どんな場合に子どもは不適切な行動をするか」の2「その行動が不適切であることは知っているが、どうすれば適切な行動ができるのか知らないとき」にあたりと考えました。

↓

どうすれば適切な行動ができるか知らないので失敗したと考え、「今後同じ失敗を繰り返さないための工夫」をしてもらえばよいのではということになりました。

これは、12-L「失敗した場合にも勇気づけよう」の3「子どものよい意図や努力をみつけだそう」にあたります。

↓

今後、遊びに混ぜてもらおうことに失敗しないために工夫できるよう、「主張的な頼み方」ができるようになればいいのではと考えました。

これは20-R「頼み方の4つのパターン」の中の「主張的な頼み方」です。

↓

「主張的な頼み方」を学んでもらうためには、ゆなちゃんのお話を聴く必要がある。

ここでは、9-L「子どもの話を聴く」11-L「さらに子どもの話を聴く」を使います。

↓

「主張的な頼み方」がわかると、ゆなちゃんはいちちゃんとまこちゃんに遊びにまぜてもらえるように、手続きを踏んで「共同の課題」にしてもらえるようお願いができると考えました。

これは、19-L「共同の課題にするにはどうすればよいか」で考えました。

## 子どもの目立を助けましょう

そこで、まこちゃんが「それは自分で考えて!」と言った後の保育士の対応を考えました。

案としては、「ゆなちゃん、何したらいいかな?」「アイデアはある?」「お客さんやってみる?」が出ました。この場面では、れいちゃんが離れて行ったので、ゆなちゃんはまこちゃんにだけ、お客さんになるということをお伝えしました。

ロールプレイをして、それぞれの感情、思考、行為をお聴いてみました。

ゆなちゃん：とにかく遊びに入れてよかった。お客さんならどうやって遊べばいいかわかる。

まこちゃん：ゆなちゃんが「お客さんになる」と自分で役を考えてくれたから困らなかったし、ゆなちゃんがお客さん役なら、どう遊べばいいかわかる。ゆなちゃんが遊びに入るのはかまわない。れいちゃんがどう思うのかちょっとだけ不安。

れいちゃん：いつの間にか、ゆなちゃんとまこちゃんが遊びを始めていたから「私はいいもん。遊ばないもん」と思った。

これでは、れいちゃんや、まこちゃんはあまり納得していない様子でした。

そこで、もう一度代替案を考えました。ゆなちゃんは、まこちゃんだけではなく、れいちゃんにも声をかけることになりました。

もう一度ロールプレイを行いました。

ゆなちゃん：「何してるの？」

れいちゃんとまこちゃん：答えず、下を向いたまま黙って作業をしている。

保育士：「(ゆなちゃんに向かって) パン作っているんだって」

ゆなちゃん：「ゆなもしたい」

れいちゃんとまこちゃん：黙って積み木を重ねている。

保育士：「(ゆなちゃんに向かって) 聞いてみたら？」

ゆなちゃん：「(れいちゃんとまこちゃんに向かって) ゆなもまぜて」

まこちゃん：「れいちゃんに聞いて」

れいちゃん：何かを取りに少し離れたところへ移動していた。

ゆなちゃん：「(私に向かって) ゆなもしたーい」

保育士：「まこちゃんは、どう思う？」

まこちゃん：「まこは、いいけど」

ゆなちゃん：「じゃあ、ゆなは何したらいい？」

まこちゃん：(急に強い口調で)「それは自分で考えて！」

ゆなちゃん：しゅんとした表情になる。

まこちゃん：下を向いて作業をしている。

保育士：「ゆなちゃん、どうする？何かアイデアはある？」

ゆなちゃん：「うーん…」

保育士：「先生の考え言ってもいい？」

ゆなちゃん：「うん」

保育士：「お客さんはどうかな？できそう？」

ゆなちゃん：「うん。お客さんしたい」

保育士：「れいちゃんとまこちゃんにお客さんになっていいか聞いてみたら？」

ゆなちゃん：「うん、(れいちゃんのところへ行って) れいちゃん、お客さんしてもいい？」

れいちゃん：「お客さんならいいよ」

ゆなちゃん：「(まこちゃんに近づいて) まこちゃん、お客さんしてもいい？」

まこちゃん：「いいよ」

(三人)：この後三人で楽しく遊びました。

保育士：「楽しそうだね」と、みんなで遊ぶことができたことを保育士も一緒に喜ぶ。

それぞれの感情、思考、行為を聴いてみました。

ゆなちゃん：お客さんになって遊びに入れて嬉しかった。またれいちゃんやまこちゃんと遊びたいと思った。

れいちゃん：お客さんならいいか、と思った。普段は苦手なゆなちゃんとも遊べると思った。

まこちゃん：ゆなちゃんが自分で「お客さん」になると決めてくれたし、れいちゃんにも聞いてくれたから、安心した。ゆなちゃん、れいちゃんとパン屋さんごっこをしたいと思います。

どんなことを学んだか1 -L の2「子育ての心理面の目標」で点検しました。3人とも「私には能力がある」「人々は仲間だ」に当てはまると思います。

そして、それぞれ

ゆなちゃん：主張的に頼む方がいい

れいちゃんとまこちゃん：きちんと頼まれたら対応しようということ

全員：友達と遊ぶのは楽しいということ

を学んだと考えました。

ゆなちゃんが自分が遊びに入ることだけを考えずに、れいちゃんにも声をかけたことで、みんなが納得し、遊べるようになったと思います。遊びにまぜてもらう時に、どうすれば主張的に頼むことができるかについて、ゆなちゃんと保育士で「共同の課題」を作って相談しながら学ぶ方を選ぶと、ゆなちゃんだけではなく、れいちゃんもまこちゃんも、どうすれば友達と仲良くすることができるかが学べ、友達と遊ぶことは楽しいと体験することができるのではないかと思います。

### 3番

成功したら喜んで

失敗したら相談し

目標決めてひとつずつ

前に進んでいきましょう

先ほどのロールプレイにあったように「楽しそうだね」と、みんなで遊ぶことができたことを保育士も一緒に喜ぶ。にあたります。

### 4番

おおやけ心と常識と

世間を渡る算段を

身につけるよう勇気づけ

「ゆなちゃんが遊びに入れてもらえるように主張的に頼む」「れいちゃんとまこちゃんは、ゆなちゃんにきちんと返事をする」このことは、社会でみんなが協力して生きていくために必要なことで、これは常識（共通感覚）と考えました。

「ゆなちゃんが遊びにまぜてもらえるように「主張的な頼み方」をすることで、れいちゃん、まこちゃんとゆなちゃんが楽しく3人で遊べた」このことは、みんなが幸せになるための行動で、これはおおやけ心にあたると考えました。

子どもも親も育ちましょう

保育士の成長としては、『アドラー育児の歌』で事例を検討することで、自ずと『パセージ』を「トップダウン」で使えるようになったのではないかと思います。

事例提供 吉さんの感想

ゆなちゃんが、れいちゃんとまこちゃんに「何しているの？」と聞いているにもかかわらず、2人は返事をせず黙ったままの状態でした。結局ゆなちゃんは遊びに入れずその場から離れていくことになり、この何ともいえない雰囲気の様子と対し、どうすればよかったのか考えたい

と思いました。以上のように『アドラー育児の歌』で点検することによって、何をどう考えたらいいのかということが順に整理され、私にできること（援助すべき点）が明確になりました。そして、ゆなちゃんが「主張的な頼み方」をすることで、れいちゃんもまこちゃんもゆなちゃんの言葉に対して、きちんと返事をし、結果的に3人でパン屋さんごっこの遊びを楽しむことが出来そうな代替案が見つかりました。よって、「主張的な頼み方」を学んでもらうことは、大切なことだと思いました。

また、ゆなちゃんは自分の考えが通らないと、特に大人に対して攻撃的になったりすることがあります。「主張的な頼み方」が少しずつできるようになることで、さらに成長して欲しいと思いました。

以上で2事例目の発表を終わりたいと思います。

尚、1事例目は鶴見京子さん、2事例目は荒崎陽子さんのご協力を頂きました。

#### 4. 考察

私たちは、自助グループで、『アドラー育児の歌』で検討することで、次のことを学びました。『アドラー育児の歌』は、

1番は、アドラー育児の骨格

2番、3番は、アドラー育児の方法

4番は、アドラー育児の目標

という構成になっていて、アドラー育児の全体像が大変分かりやすいことです。自助グループでは、『パッセージ』のテキストを基に事例を検討しながらも、メンバーからさまざまな意見が出て、時には方向性がわからなくなったりします。それはテキストを「ボトムアップ」でとらえているためでもあると思います。「ボトムアップ」でテキストをめくっていると、つい、ページとページのつながりを見失いがちになってしまいます。『パッセージ』を受講しただけのメンバーの場合は、80ページもあるテキストから「トップダウン」で筋道を立てて事例を考えていくことは、なかなか難しいのではないかと思います。しかし、『アドラー育児の歌』は、大変コンパクトにまとまっており、考え方の筋道が立てやすく誰でも『パッセージ』を「トップダウン」で考えることができるのでは、と考えました。これは、グループとして、全員が同じ筋道、同じ目標をもって考えやすくなるという利点があることに気づきました。

また、『アドラー育児の歌』は、七五調の歌詞であることから、現場でまさにその瞬間に、歌詞が頭の中にテロップとして浮かびやすいということです。ワンフレーズで歌詞を持ち帰ることができ、グループで学んだことを思い出しながら、子どもを勇気づける方向へ自然と向かっていくということに気づきました。

例えば、けい君はその後、泣き止むまでの時間が短くなり、自分の機嫌を自分でなんとかする姿が良く見られるようになったそうです。鶴見さんご自身は「優しくきっぱり育てましょう」と「おおやけ心と常識と」を大切にしながら保育や子育てをされているそうです。

また2事例目の荒崎さんは、「どんなときでもプラスを見」と、「子どもの自立を助けましょう」ということを大切に保育をされているそうです。具体的には子どもの話をまず聴くことを大切にしようと思っておられます。

荒崎さんは、保育園では指導的な立場の保育士さんなのですが、4歳児クラスの担任に「主張の強いAちゃんがいて、一緒に遊んでいるBちゃんに対して言動がきつくて困っている。」と相

談を受けました。担任はAちゃんに注意をしたいと言いましたが、荒崎さんは、まず子どもの話を聞くことを提案したそうです。後日、担任がBちゃんに、「Aちゃんに強い言い方で言われたりして困ってない？」と聞いたところ、「別に、気にしていないよ。もう、4歳だから困ったら自分で言えるよ！」と明るく答えられ、Bちゃんのたくましさや成長を感じ、嬉しかったという報告があったそうです。

金沢のメンバーは、古参の2名を除いてはアドラー心理学に出会って5年も経たないメンバーがほとんどです。しかし、『アドラー育児の歌』を使うことによって、みんながアドラー心理学に基づく育児や保育の目標、考え方、方法について共通理解しながら、事例提供者さんと子どもを勇気づけることができているように思います。まさにこれはグループの援助力の向上ではないかと思えます。また『アドラー育児の歌』と、それに基づいて学びを共にする仲間がいることで、メンバー一人一人の援助力もあがってきているように思います。皆さんも、自助グループなどで、『アドラー育児の歌』を使ってみてはいかがでしょうか？

## 5. 指定討論（指定討論者 堀田洋子）

Q. 今回の実践発表は、保育の中で援助力が上がったというお話でした。石川さん自身は保育士さんではないですが、子育て中のお母さんとして、学んだことや援助力が上がったというお話があれば教えていただけますか？

A. 家でよく使うのは、やっぱり1番と2番の歌詞です。困ったなと思う場面でも、「どんなときでもプラスを見」だったなあ、と思ってプラスの面を探すと、構えが変わります。次は、「学んでもらうことを決め」で、自分は子ども達に何を望んでいるのかがみえてくると、2番にいけると思うんです。私は2番の「手を出さないで学ぶのと 相談しながら学ぶのと どちらが良いか考えて」を大切にしています。うちの娘達は、小6、小3、年長なのですが、3人で協力して、お手伝いというよりは、家事を自分の仕事としてやってくれていると思います。

私が仕事で遅くなる時は、機転を利かせて3人で協力しながら、大量に届いた生協の荷物を2階のキッチンまで運んでくれたり、着替えやタオルを自分達で用意し、お風呂に入ってくれたりします。親バカですが、3人が家族のために協力しあっている姿、自立している様子に感心してしまう時がよくあります。自分自身、援助力が上がったと思っています。ただ、「学んでもらうことを決め」は、自分一人ではまだまだ難しいので、メンバーに相談することもよくあり、沢山助けてもらっています。

Q. 発表の中で、「ボトムアップ」、「トップダウン」という言葉が出てきたと思うのですが、そのあたりをもう少し詳しくお話していただけますか？

A. 「育児のアルゴリズム」の講座で野田俊作先生に教えていただいたんですが、「ボトムアップ」というのは、『パセージ』で、ひとつひとつの技法を学び、それらを組み合わせることで、やがてアドラー心理学の育児らしくなっていくという方法です。

「トップダウン」というのはいわば、航空写真でアドラー心理学の育児全体を俯瞰する方法です。そうすることで『パセージ』で学んだ知識や技術を立体的に使えるようになってきます。

「ボトムアップ」のやり方だと、細部は良く分かるのですが、『パセージ』の全体像は見えにくいと思います。いわば、地図を持って歩くようなものです。やがてはたどり着くけど、道に

迷ったりすることもあるのではないのでしょうか。

「トップダウン」のやり方だと、全体像が良く見えているので、目的地とそこに至る道筋が見え、道に迷わないで、たどり着くことができると思います。

Q. 『アドラー育児の歌』を使えば、アドラー育児を「トップダウン」で考えることができそうですね。それはグループの援助力を上げることと関係がありそうですが、いかがですか？

A. 『アドラー育児の歌』を使って検討すると、事例提供者さんとその子どもを勇気づけるために『パセージ』のどのページをどのように使うかというつながりがわかってきます。この点は検討前と大きな違いです。これが、グループの援助力のアップだと思います。例えていうなら、新しいメンバーも古いメンバーもみんな同じ道を歩いて、みんな同じ景色を楽しみながら、目的地に行ける感じです。みんなでアドラー育児の道を歩ける気分は格別です。

## 6. 最後に

私たちががやきの会は、この日の実践報告の発表に向けて、頑張ってきました。誰か一人が頑張ったのではなくて、一人一人が、ああでもない、こうでもないと真剣に言いながら、知恵を絞り出し、学びあいました。このプロセスこそが私たちの宝物です。私たちの自慢話にも近いこの実践発表を聴いていただき、ありがとうございました。

最後になりましたが、私たちの実践にスーパーバイザーとしてご指導、ご助言を親身になって下さった大竹優子先生に、心からお礼を申し上げたいと思います。

### 実践報告を終えて

発表後に懇親会で、野田先生に「金沢の発表は、どうでしたか？」とお伺いすると、ニコニコしながら「はなまる～」と、言っていたことが、忘れられません。

エンカレッジ金沢は、協力的で本当に仲の良い自助グループです。もともと友人だったり、知り合いだったり、子ども同士が仲良しだったりするメンバーも多く、自助グループ以外でもよく顔を合わせ、アドラー心理学談議になることがあります。今回の発表に際しても、発表直前の追い込み時期は、かなり無理をしましたが、それでもみんなで学ぶ喜びを感じ、いつも以上に元気に輝いていた？自分を思い出します。

自助グループとして実践報告を発表したことに勇気づけられ、ますます意気揚々と学んでいる今日この頃です。

この春、長女が小学校を卒業し、卒業記念として家族一人一人に手紙を書িয়েくれました。私への手紙の冒頭は「ママがアドラー心理学を学んだおかげで、家族みんなが楽しく仲良く暮らしています。」でした。（もちろん、『パセージ』のテキスト31-Lの1.「家族に宣伝しない」は守っています。）家族、仲間を支えられながら学び続けられることに心から感謝しています。

これからも、野田先生、大竹先生、その他の多くの先輩方から学んだことを大切に、自助グループでゆっくりと味わいながら学びを深めていきたいと思います。

## 文献

- 1) アドレリアン30(1):28, 2016

## 更新履歴

2021年7月20日      アドレリアン掲載号より転載